



四 指先からの恋（地球）

この宇宙が生まれて何年になるのだろうか。何億、何兆光年なのか。果てしない、想像もできない数字。誰もビッグバンを見たことがない。本当に、宇宙は生まれたのだろうか。もともとあったのではないか。太陽も、あたしが今いる地球も、もともとあったのではないか。じゃあ、もともとって何？あたしももともといたのか。考えれば考えるほど迷宮の世界に陥ってしまう。

そんなことはどうでもいい。それよりも、何人の人があたしの指に触れ、あたしの精神を通り過ぎていったのだろうか。あたしは待つだけの人。あたしのように待つだけの人はこちらに何人も、何十人もいる。もちろんここだけではない。この国に、この星に、この宇宙に、同じような場所があり、あたしと同じように誰かが来るのを待っているのだ。

あたしが誰かを待っているように、誰かはあたしたちを求めている。需要と供給が一致したときに、あたしたちは出会い、別れる。わずかの時間だが、相手は精神的な満足を得て、あたしは物質的な満足を得る。これも交換の一種なのか。

「三番の、赤ずきんちゃん。お客さんですよ。三号室へ行ってください」

そうあたしの名前は三番で、赤ずきんなのだ。同じ部屋には、一番も、二番も、十番も、百番もいる。白雪姫やかぐや姫、シンデレラに妖精など、童話の主人公たちのほかに、カメ星人も、ツル星人も、キリギリス星人も、コオロギ星人など、他の惑星の宇宙人もいる。

あたしは椅子から立ち上がる。他の童話の主人公や星人たちは、本を読んでいたたり、音楽を聴いてたり、うつらうつらと首を振っていたりしている。

初めて、この場所に来たときには、他の星人たちよりも指名が多いことが嬉しかったり、競ったりしたものだった。だが、最終的にはお客さんたちがあたしたちを選ぶ。選ぶ権利はあたしたちにはない。選ぶ権利のないあたしたちが競っても仕方がない。嫉妬を感じて、仲が悪くなるだけだ。デメリットだけで、メリットはないもない。それは、仲間の星人たちも同じだった。だから互いに競うことはやめた。そう、あきらめたのだった。敵ではない。だが、味方でもない。それぞれが個として存在し、客の求めに応じるだけだ。

たまには、部屋が寒いだとか、飲み物がまずいだとか、お店に対して不満を持ち、共同戦線を張ることはあっても、仲間だなんて意識はない。たまたま、隣に座った相手に対して、「今日はいい天気ね」とか「寒くなってきたね」とか、一日中部屋にいるくせに、時候のあいさつを交わすだけだ。

あたしは読んでいた本を椅子の上に置く。部屋の反対側に座っていたマグロ星人が顔をあげた。いや、マグロ星人なのか、ハマチ星人なのか、よくわからない。あたしは魚介類には詳しくないし、何星人でもどうでもよいことだ。その魚類星人と目が合う。

マグロ星人はあたしの顔を見て、唇の左のほうはやや開いた。微笑んでいるのか。マグロ星人がどういう時に微笑み、どういう時に悲しむのかも知らないし、口を大きく開けたら笑うのか、目を吊り上げたら怒っているのかをあたしは知らない。知りたくもない。ただ言えることは、相手と同じそぶりをすればよいのだ。真似をすればよいのだ。

唇の左の端を緩める行為が、好意を抱いているのであれば、微笑返しをするし、反対に、さげすんでいるのであれば同じようにさげすみ返すだけである。それが宇宙の法則なのだ。という本を、今、読んでいたところである。他の星人たちは、空気が動いたのと同じように何の反応もなかった。

呼ばれた部屋のドアの前に立つ。ドアをノックする。「はい」と低い声で返事があった。ドアをゆっくりと開けて、中に入った。そこには誰もいない。部屋の窓際にお客さんが立っていた。服は着ているものの、頭から首に掛けて体毛に覆われていた。犬やオオカミのような姿をしている。オオカミ星人と呼ばばいいのか。でも、何星人でもいい。初めてでも、二回目でも、あたしのお客さんには変わらないのだ。そのオオカミ星人は窓から外の景色を眺めていた。

あたしは何と声を掛けたらよいのかわからずに、ドアを開けたまま立ち尽くしていた。その人がこちらをゆっくりと振り返った。予想通りオオカミ星人だった。

「こんにちわ。アルプスの少女ハイジちゃん」

その人は吊り上った目元を無理やりに下げ、大きな口をできるだけ開けずに、小さな声であたしに話しかけてきた。あたしは赤いずきんを被り、手には摘んだ野いちごを入れるかごを持っている。どう見てもアルプスの少女には見えないはずだ。当惑しながらも、先ほどまで読んでいた本で書いてあったように、相手に合わせるように、目元を下げ、おちょぼ口で囁いた。

「ごめんなさい。あたし、ハイジではないんです。赤ずきんです。ハイジと替わりましょうか？」

「はっはっはっはっ」

目の前のオオカミさんは崩れように体を折り曲げて笑い出した。突然の笑い声に、あたしはむっ

となった。

「何がおかしいんです」

この時ばかりは、本の内容は忘れた。

「はっ、はっ、はっ。いや、ごめん、ごめん。君があまりにも真面目な顔で言うものだから、つい、可笑しくなってね」

オオカミさんは元のやさしい顔に戻った。

「それよりも、そんなことに突っ立っていないで、部屋の中にどうぞ。そこの椅子に座ったら？」

オオカミさんが毛むくじゃらの指で、花柄のソファを指差した。

「ぷっ」今度は私が笑った。

「何がおかしいんだい？」

今度はオオカミさんが怪訝な顔をした。でも、決して怒ってはいなかった。あたしが笑ったのは、オオカミさんと花柄のソファがまったく似合っていなかったからだ。でも、それを口に出すと、折角、あたしを指名してくれたオオカミさんに失礼だと思ったので、「ちょっと、思い出し笑いです」と照れたように誤魔化した。

あたしの右隣にオオカミさんが座る。

「じゃあ、いいかい。はじめよ」

「はい」

緊張する。これまで何人の人とこうして向き合ったのだろうか。数え切れないぐらいの人数だ。でも、いざ、こうして、直接、向き合うと、ほっぺたは赤くなるし、口の中は乾くなるくせに、何回も唾は飲み込むし、胸は高鳴るし、お腹は痛くなるし、指の先は震えるし、座っているはずなのに足がガクガクとなってしまう。そう、「なるし」の連合軍が鼓笛隊で行進しているようになるし。ごめん。また、出てしまった。

「さあ。いくよ」

あたしは身を硬くして、固唾を飲んで、オオカミさんの行動を見守る。オオカミさんの右腕が上がった。曲がっていたひじが伸び、人差し指が突き出される。爪は丸かった。オオカミさんは、この日のために、爪をきちんと切ってくれていたんだ。やさしい人。清潔な人。でも、深爪ではない。

あたしもオオカミさんに見習って、指を差し出す。もちろん、あたしの指も爪はきちんと切っているし、爪きりのやすりの部分で、爪を弧を描くように丸めている。爪の根元部分には白い三日月がぼんやりと浮き出ている。こうして他のことに注意を向け、緊張を抑えようとするものの、それでも指先は震えている。その震える指先が毛むくじらの中に白さを突き出したような指先に合った。電流のようなものが流れてきて、あたしの脳の中に直撃する。

ああ。感嘆符。あたしはこの言葉しかでなかった。ため息なのか、快感が天井にまで到達した声なのか、それとも、また、別の感動なのかはよくわからない。

あたしの頭の中には、暗い闇が広がっている。向こうから光が見えた。その光が頭の横を掠める。ウワオ。誰かの叫び声。苦しみうめく声。倒れる音。それでも、こちらからも相手と同じように光を発射している。銃撃戦だ。戦争なのか。遊びじゃない。冷静かつ気が狂ったように銃のレバーを動かし続けている。また、誰かが倒れる音がした。自分もそうなるのは時間の問題だ。

でも、こうして銃を撃っていること自体が不思議な気がする。夢なのか。現実ではないのか。ドサ。隣で同じように銃を撃ち続けていた仲間が覆いかぶさって来た。重い。それでも、銃を撃ち続ける。倒れた仲間の頭が吹き飛んだ。自分の代わりに、死んだ仲間が犠牲となってくれた。盾となってくれた。これで、思う存分、銃を撃てる。

次は、死体の右腕が吹っ飛んだ。血が噴出す。その血が顔にかかる。口元に垂れる。生温かく、しょっぱい。こんな非常時なのに、血の味がわかるだなんてどうかしている。頭が吹き飛び、右腕がもがれたはずなのに、生きている感触が伝わってくる。そう。あたしは生きているんだ。生きているから感じられるんだ。

だけど、いつまで、いつまで、こんな風景が続くのか。あたしはもう耐えられない。いくら仕事でも、お金をもらっても、もう追体験するのは嫌だ。と思うことなく、光の銃も消え、倒れ掛かってきた人もいなくなった。あたしの指先からオオカミさんの指先が離れた。

「ふう」

オオカミさんは大きなため息をつくど、ソファーにもたれた。首が根っこから折れている。顔はいくぶん硬直しているものの、全てから解放された安堵感からか、頬はうっすらと赤みが差していた。

「ありがとう。少しは楽になったよ」

「水でも入れましょうか」

「ああ。ありがとう」

あたしは頭が少しくらぐらしながらも立ち上がり、ベッドの片隅にある水差しからグラスに水を注ぐとオオカミさんのところに戻った。そして、一つをオオカミさんの目の前に差し出し、もう一つをテーブルの上に置いた。

オオカミさんはあたしからグラスを受け取ると、悪夢を全て流し切るかのように水を一気に飲み干した。あまりの勢いなのか、あまりの大きな口のせいなのか、尖った歯の隙間から水が漏れ、あたしのスカートに点々の星を刻んだ。

この仕事はいつまでたっても慣れないけれど、こうしてお客さんの満足そうな顔を見ると心がほっとする。あたしのような者でも誰かに役立っていると実感できるからだ。それは同じ生き物に対する愛なのか。相手を愛することで自分も愛されていると思えるからなのか。例え、それが勘違いだとしても。

ぴひよろ。ぴひよろ。時計が鳴り出した。タイマーが時間の終了を告げる。設定時間は一時間。指を合わせていただけなのに、もう一時間が過ぎたのだ。そう。悪夢も一時間で終わった。

「どうされます。シャワーを浴びますか？」

あたしは基本サービスどおりにオオカミさんに声を掛けた。ソファーでぐったりしたままのオオカミさん。

「ありがとう。シャワーを浴びたい気持ちはあるけれど、もう少し、このままでいるよ」

「あたしだけシャワーを浴びてもいいですか？」

お客さんよりも先にシャワーを浴びることに抵抗があるものの、このままの状態ではられない

。本当に汗だらけなのは実はあたしの方なのだ。

「ああ。いいよ。僕の方まで浴びてくれ」

もちろん、あたしがオオカミさんの分までシャワーなんて浴びられない。オオカミさんのジョークだ。でも、あたしはそれを真に受けた。あたしは部屋のドアのそばにあるユニットバスへと向かい、服を脱ぐと、シャワーを二人分、つまり、お湯の量と回数を増やして、念入りに浴びた。この仕事は、指しか使わないのに、頭先从足先まで、体全体に汗を掻く。特に、髪の毛はプールで泳いだ時と同じようにびっしょりと濡れる。まさに、悪夢を見た後に目覚めた時と同じだ。

頭からシャワーを浴びる。全てよ、流れろ。なにもかも、流れろ。あたしの開いた毛穴から膿が流れていく。ぽつん。ぽつん。髪の毛の先までタオルで水分を拭き取るとあたしは浴室から出た。オオカミさんは会ったときと同じように窓の外をじっと見つめていた。あたしの気配に気がつく

「すまないね。僕の方まで流してくれて」と、本当にすまなさそうに頭を下げた。

「いいえ。これがあたしの仕事なんです」

この時は、相手には会わずに、努めてにこやかに対応した。

それから、あたしとオオカミさんはソファにもう一度座ると、桜が咲いたとか、今年の冬は特に厳しい寒さだったとか、たわいもない世間話に興じた。もちろん、人差し指は合わせない。

ブー。ブー。二度目のベルが鳴った。あたしの時計だ。これで九十分が過ぎたことになる。

「もうお別れだね。赤ずきんちゃん」

「はい」

「また、会えるかな」オオカミさんの口元がやわらぐ。

「会えますよ。今度、地球に来るのはいつですか？」

「わからないな。でも、早く、君に会いたいな」

だが、今回は、あたしが赤ずきんになれるかどうかはわからない。お店のマスターの指示しだ。でも、そんなことは、オオカミさんには言えない。それに、オオカミさんはあたしを指名したんじゃない。赤ずきんちゃんを指名したのだ。赤ずきんちゃんに恋をしているだけなのだ。だから、どこかの誰かが赤ずきんの姿かたちをすれば、それでよいだけだ。でも、本当のところは、嘘でも、虚構のあたしを指名してほしい。ただし、あたしはそんなそぶりは見せずに

「でも、また、あの場所に戻るのですね」と答える。そう、あの、としか表現できない場所に。

「ああ。そうなりそうだ」

オオカミさんの目はあたしの顔を見つめながらも、自分の心からあたしの心に移ってきたはずのあの暗闇の、あの場所を凝視していた。

その後、お店では、あたしは三番、赤ずきんちゃんのままだった。だけど、オオカミさんはあたしのところには訪れなかった。ひよっとしたら、かぐや姫やシンデレラ、白雪姫、妖精、それともマグロ星人たちを指名しているかもしれない。いや、そうあって欲しいと思った。生きていて欲しいと思った。あの場所から戻って来て欲しいと思った。例え、二度と会えないにしても。

ピンポン。あたしはドアのインターホンを押した。部屋の中からあたしを確認したのか、ゆっくりとドアが開いた。そこにはキリギリスの姿をした星人がいた。

「こんにちは。御指名ありがとうございます。赤ずきんです」

あたしはとりあえず満面の笑みを浮かべた。でも、仕事が終わる頃にはこの笑顔が消えてなくなることには知っていた。今日はどんな体験が移ってくるのだろうか。不安ばかりが増す。

「いらっしやい」

そんなあたしの不安を察してか、キリギリス星人は落ち着いた低音のボーカルであたしを迎えてくれた。あたしの脳の中からオオカミさんは消えた。